

Heritage and Digital Medium

講演者：赤川 夏子

(Senior Lecturer, The University of Queensland)

報告者：長友 淳

(関西学院大学国際学部教授)

1. はじめに

本講演会は、12 月 21 日（金）15:10～16:40 に関西学院大学図書館ホールにて実施された。赤川博士による約 70 分の講演の後、質疑応答時間が約 20 分設けられ、活発な議論が交わされた。赤川博士は、オーストラリアのクイーンズランド大学言語文化学部（School of Languages and Cultures, The University of Queensland）にて教鞭を採る傍ら、遺産と文化政策をめぐる関係性や無形文化財に関する研究・出版に精力的に取り組んでいる。また、ICOMOS（International Council on Monuments and Sites）や ICOM（International Council of Museums）の専門委員も務めている。主な出版物として、*Heritage Conservation in Japan's Cultural Diplomacy: Heritage, National Identity and National Interest*（単著 Routledge 2014）、*Safeguarding Intangible Heritage*（共著 Routledge 2019）、*Intangible Heritage*（共著 Routledge 2008）などがある。国家が遺産や記憶をどのように扱うかというテーマや、それらがデジタル時代でのような展開を見せているのかという講演内容は、本学で社会学や文化人類学を学ぶ学生にとって非常に意義深いものであった。なお、講演および質疑応答は英語にて実施された。

2. 講演概要

2.1 講演主旨

今日の遺産観光をめぐる言説の状況において、有形文化財と無形文化財の遺産の関係性は、学問的な関心を集めている。これらの二つを結びつけて研究することは、遺産の意味の解釈において、何が「真正」なものであり、何が「本物」であるのか、という仮定そのものへの問いにもつながる。この講演では、はじめに真正性をめぐる理論を紹介する。次に、事例研究として、「デジタル」あるいは「ヴァーチャルな」遺産について、これまで研究してきたフィールドの写真などを交えながら述べる。デジタル時代は進展し、遺産観光、博物館、美術館、ギャラリー等の分野でもデジタル技術が応用されており、有形文化財については研究が進んでいるものの、無形文化財については研究の蓄積が少ないのが現状である。これらの点を踏まえ、今回の講演では、真正性の概念や意味の構築・消費の過程に着目しながら、デジタル文化遺産の主体についても考察したい。

2.2 遺産の動態性：現代の構築物としての遺産

文化と同様、遺産も静的なものではなく動態的なものである。遺産は変化に富み、それゆえ遺産を遺産として構築していくプロセスは、現在進行形で捉えられるべきものである。「現代の構築物」として、遺産は今日のニーズや需要に対する意図のある反応であり、それらは実際に必要性によって形作られるものである。ジョン・タンブリッジとグレゴリー・アッシュワースは、以下のように遺産の利用や遺産と歴史の結びつきが、現代によって構築されていると指摘している。

現代によって、現代に利用するために想像された過去から継承物が選択され、想像された未来に何を継承すべきかが決定される…（中略）…（遺産と歴史の間の）差異とは、遺産において現代と未来における利用が重要であり、文化資源は歴史家が歴史的とみなすものを含めむしろ変容し、そしてその解釈とは明確かつ集約的に消費される生産物なのである（Tunbridge and Ashworth 1996: 6）。

つまり、遺産には現代の目的に応じた過去の選択的利用という側面があり、そのことから、過去の「現実」を定義するプロセスは、めったに中立的であることはなく、時に政治的なものとなる。それぞれの社会や時代が、あるべき現実の様々な形を持ち（Hone 1984: 1）、それゆえ現代とは「休眠しているものを呼び起こし、埋没しているものを掘り起こし、現代の要求に沿って遺産を再加工する（過去にとっての）能動的なパートナー」なのである（Lowenthal 1998: 141）。この過程において、過去からの選択は、「現代にとって文化的、政治的および経済的な資源」となる（Graham and Howard 2008: 2; see also Akagawa 2016）。

これらの点を踏まえると、次のような問いが生まれる。遺産をめぐる社会的実践によって生まれる公的空間において、地元社会が遺産の街としての足掛かりを得るプロセスとはいかなるものであろうか。とりわけ都市の文化的意味をめぐる文脈において、多重性に満ちている地元社会が遺産の場所性を再構成し始める動態性とはいかなるものであろうか。

2.3 真正性の概念

真正性をめぐる判断は、情報源の多様性の価値に関連し、これらの情報源とは、形式やデザイン、素材や物質、利用と役割、伝統と技術、場所と舞台装置、気力と感情など、多様な事象を含むものである（Akagawa 2014: 67-73）。これらの利用によって文化遺産の特定の芸術的、美術的、社会的および科学的な側面の構築が可能となる（Akagawa 2014: 72; see also Akagawa 2016）。

巡礼者とはいかなる存在であろうか。巡礼者は過去にまなざしを向け、アイデンティティを模索する。その際の歴史や過去、それらにまつわるストーリーは、本質的なもの、真正なものといえるのであろうか。上記に示した「現代によって構築される遺産」という視点に立つ場合、遺産を巡礼者として訪れる人々の文化的実践の真正性もまた、構築主義的に捉える必要が出てくる（Akagawa 2014: 22-24）。

2.4 事例研究

上記の理論的視座が実際の事例にどのように関連するのか、自身のフィールドワークから写真を交えながら紹介する。

カンボジアのアンコールワットの「見せ方」をめぐり、ドローン使用のあり方や紹介ビデオなどのデジタルメディアの活用と制限が多くあり、それは文化の正しい見方を誰が決めることができるのか、という文化の真正性の議論とも深く関連する。

ドイツ・ドレスデンの空襲とその再建方法においては、ドイツ国内で戦争の記憶をいかに残すのかという大きな論争があった。この点は、戦争による破壊とい



Dresden 1945 Bundesarchiv, Bild 183-Z 0309-310/G. Beyer/CC-BY-SA 3.0

う遺産が、先ほど述べた現代の目的に応じた過去の選択的利用という側面や、そのプロセスの非中立性という問題と絡み合っている。

同様に、災害やテロリズムの記憶を社会や国家がいかに遺産として残すのかという点も、上記の事例と深く関連する。たとえば、2015年のネパールで発生した地震によるカトマンズの被害や、2001年にタリバンによって破壊されたバーミヤンの仏教遺跡、および2015年にイスラム国によって破壊されたパルミラ遺跡などの事例が挙げられる。

これらの文化遺産や集合的記憶をめぐる遺産の見せ方や、その展示をめぐる構築主義的視点は、上記以外にも様々な文化の展示において有益な視点を提供する。たとえば、ヴァン・ゴッホ博物館、大英博物館、9/11博物館におけるマルチメディア・ガイドやアプリで提供される説明や語りを聴く時、動画 *Kabuki Abatar* のようにデジタル空間での歌舞伎役者への変身を見る時、オーストラリアのソブリンヒルでゴールドラッシュのストーリーに触れる時など、我々の日常におけるあらゆる経験において実は深く関わっていると言えよう。

デジタルという媒体が何をもたらすのか、それによって何が得られ、失われるのか今後も考察していきたいと思う。

引用文献

- Akagawa, N. 2014. *Heritage Conservation in Japan's Cultural Diplomacy: Heritage, National Identity and National Interest*. London: Routledge.
- Akagawa, N. 2016. Rethinking the global heritage discourse – overcoming ‘East’ and ‘West’? *International Journal of Heritage Studies*, 22(1): 14-25.
- Horne, D. 1984. *The Great Museum: The Re-presentation of History*. London: Pluto Press.
- Graham, B. and Howard, P. 2008. “Introduction” In B. Graham and P. Howard (eds.), *Heritage and Identity*, pp.1-15. London: Ashgate.
- Lowenthal, D. 1998. *The Heritage Crusade and the Spoils of History*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tunbridge, J. E. and Ashworth, G. J. 1996. *Dissonant Heritage: The Management of the Past as a Resource in Conflict*. Chichester; New York: John Wiley.